

「男、突っ走る！」

第34回

第一稿

作・壽倉 雅



1 名古屋芸術専門学校・全景

2 同・1階・事務局

吉野、鈴島たちが仕事をしている。

鈴島「吉野さん」

吉野「はい？」

鈴島「キャンプの学生スタッフの配置、どうですか？」

吉野「（書類を見せて）このメンバーで、どうでしょうか？」

鈴島「高校生の希望学部との人員配置は、これで良いかと思えます。映像班の確保は大丈夫ですか？」

吉野「渡部先生に手配済みです」

3 同・4階・401教室

浩平、夏美、渡部が話している。

浩平「キャンプの映像班ですか？」

渡部「眞榮田は去年確か高校生で参加したから分かると思うけど、一泊二日の様子を

映像にして、最後の全体会でスクリーンに映したの覚えてるだろ」

浩平「はい」

渡部「その記録係に、今回一年生には眞榮田と長井にお願いできないかと思って。福沢と加藤と大久保は、予定が合わないって断られたんだよ」

夏美「七月の最終週の土日ですよ？（とスケジュール長を見ながら）私は大丈夫です」

浩平「俺も、必ず予定空けておきます」

渡部「良かった。二日目の夕方に映像を流すから、その間の編集作業が大変かもしれないけど、大丈夫か？」

浩平「大丈夫です」

夏美「私も頑張ります」

渡部「じゃあ、よろしく頼む。詳細決まったから、また連絡するから」

と、出ていく。

夏美「オッケー出したものの、私たちにでき

るかな」

浩平「初めからそんな不安でどうするんだよ」

夏美「けど、私たちまだ映像編集なんて、授

業課題ぐらいでしかやったことないんだよ。

いくら先輩たちも一緒だからって、できる

かな」

浩平「そういうところで、先輩たちから技術

を学ぶんじゃないか。実践あるのみだよ」

夏美「まあ、それもそうか」

難しい顔の夏美——と、拓海が入って  
くる。

浩平「あれ、ぐっちどうしたの」

拓海「プレゼン資料を作りに来たの」

浩平「そっか……もう来週末だった」

夏美「そっちのチーム、プレゼンの台詞覚え  
た？」

拓海「まだ台本の直しがあるの」

夏美「プロになるためについていうテーマで毎年  
学生のプレゼン大会をやるのは先輩たち  
から聞いたけど、こんなに大変とは思わな

かった」

浩平「うちのグループはまだ良いけど、別のグループなんてとうとうプレゼンの授業に来なくなったやつもいるらしいぞ」

夏美「え、鈴木先生の授業に来ないなんて、大した神経してるね」

浩平「人が揃わないってことは、プレゼンの準備も進まないだろ。だからチームの人間関係が悪化してるんだって」

夏美「いろんなグループがあるんだね」

浩平「いろいろひと段落したら、みんなでバーベキューでも行かないか」

夏美「ああ、良いかもしれないね。みんなですりょういいう何か企画やるのも」

拓海「とにかくプレゼンの準備、進めなきゃ」

夏美「せっかく夏休みに入ったのに、やっぱり私たちは休み暇なんてないんだね」

それぞれパソコンに向かって作業を始める。

自販機でジュースを買っている瑞枝――  
――と、雪奈が入ってくる。

雪奈「あ、みずちゃん」

瑞枝「ゆきちゃん、お疲れ」

雪奈、自販機に小銭を入れて、ジュースを買う。

雪奈「やっぱりみんな、学校が休みの日でも集まってるね。さつき四階で眞榮田君たち見かけた」

瑞枝「映像の授業課題もあるしね。それに鈴木本先生の授業のプレゼン大会の準備もあるから」

雪奈「私も今日、それやりに来たの」

瑞枝「ゆきちゃんのグループは順調？」

瑞枝と雪奈、缶ジュースを飲みながら、  
雪奈「まあね。最初は全然意見合わなくてどうしようかと思ったけど、ようやくみんな同じ方向に向いてきたって感じ」

瑞枝「どこのグループの、一回は絶対揉めて

るのかな」

雪奈「いや、うちーのところは揉めずに順調に進んでたよ。ほら私、鈴木先生の授業うちーと一緒にだからさ」

瑞枝「そっか。まあ、うちーだもんね。上手にチームワーク良くやってるんでしょ」

雪奈「学園祭の時だって、駄菓子屋とお化け屋敷、両方やってたんでしょ」

瑞枝「そうそう」

雪奈「よくやるよね」

瑞枝「私ね、なっちゃんと話してたんだけど、最初うちーは癒しキャラだと思ってたの。でもお化け屋敷の準備一緒にやっていくうちに、みんなのことを考えてくれたり、時には場を盛り上げてくれるコメディ要素も持ってるんだなって気づいたの」

雪奈「そうなんだ。確かにうちーは、マルチなことができる人かもしれないね。癒しキャラで大人しい人だったら、とてもあのプレゼン大会のグループワークで仕切れる



わけがないもん」

瑞枝「ある意味、人を巻き込んだり、誉め言葉で言うと、天然人たらしってやつかな」

雪奈「そうかもしれないね」

瑞枝「あ、早く準備しなきゃ」

雪奈「そうだった、私も行かないと」

5 同・4階・廊下

エレベーターから瑞枝と雪奈が出てくる――と、ベンチに座った雅也が弁当を食べている。

雅也「（瑞枝たちに気づき）お疲れ」

雪奈「あれ、うちーいつ来たの？」

雅也「さつき。とりあえず昼食べようと思つて、鞆だけ402教室に置いてきた」

瑞枝「うちーもプレゼンの準備？」

雅也「まあ、準備って言っても台本の最終チェックと、台詞覚えかな」

雪奈「そうだ。うちーはシナリオ専攻だから、こういう時の台本作りは絶対得意でし

よ」

雅也「やめてよ。そうやって言われることが一番のプレッシャーなんだから」

瑞枝「完璧でしょ、もう？」

雅也「とんでもない。いくら内容が固まってもさ、伝える要点をちゃんと伝えられなかったら意味がないでしょ。だから、何とか台詞も覚えようと思ってるんだけど、俺、本番に弱くてさ、忘れちゃうかもしれないんだよね」

瑞枝「うちーでも緊張することあるんだ」

雅也「当たり前でしょ。数人の前で話すことだって緊張するのに、プレゼン大会は一年生全員が参加するんだよ。約七十人の前で話すってことは、七十人の目、つまり百四十個の目が一斉にこっち見るんだよ。その状況で緊張しないわけがないでしょ」

雪奈「うちーなら大丈夫だって。ちゃんと自分たちのグループで決めた考えを、自信もって伝えれば、多少言葉がつまったり、

台詞通りに行かなくても聞いている人には通じるって」

雅也「そうかなあ」

瑞枝「変に不安な気持ちになるぐらいだったら、その気持ちが無くなるぐらい、練習したり自分の考えを整理することだね」

雅也「みずちゃんの仰る通り。ここで不安になってもしょうがないもんね。頑張って練習します」

笑顔で頷く瑞枝。

6 同・全景（一週間後）

7 同・8階・廊下

学生たちが集まっている――エレベーターから下りてくると、プレゼンテーションルームに入っていく。

ベンチで一人、不安な顔で座っている雅也――と、突然頬をつままれる。夏美である。隣に一緒に並んでいる瑞枝。

夏美「うっちー。笑顔だよ、笑顔」

雅也「なっちゃん……」

瑞枝「どうしたの、うっちー。顔が固まってるよ」

雅也「だって、次なんだもん……」

瑞枝「大丈夫だって」

雅也「……」

8 同・同・プレゼンテーションルーム

学生たちが椅子に座っている――前で  
スライドショーを見せながら話してい  
る雅也と数名の学生たち。後ろでは、  
渡部、鈴木ほか職員たちが立ち見で見  
ている。

雅也「僕たちのグループは、プロになるため  
にどうするかと考えた時、『視野を広げる』  
というところに着目をしました。では、こ  
ちらの画面をご覧ください」

と、話していく。

9 栄の街（夜）

雅也、夏美、瑞枝が歩いている。

雅也「やっと終わった」

瑞枝「お疲れ様」

夏美「全然普通に喋ってたよ」

雅也「そう？ なっちゃんの顔マッサージの

かげかも」

夏美「そういうことにしといて」

瑞枝「結構、チームによって雰囲気が違うの

が分かったね」

夏美「良いチームは、やっぱりスムーズに行

くし、話も分かりやすいと思うけど、そう

じゃないところは、ねえ」

雅也「みずちゃんのグループもなっちゃんの

グループも、別に問題はないと思ったけど」

夏美「けどまとめるの大変だったんだから」

雅也「いろんなところでそういう話は聞いて

たよ」

と、夏美の電話が鳴る。

夏美「眞榮田からだ。（と電話に出て）もし

もし？ ああ、今日はお疲れ。今？ みず  
ちゃんとうっちーと帰ってる途中だけど。  
え、そうなの？ 多分二人とも良いと思う  
けど。ちよっと待ってね。(と雅也と瑞枝  
に)今眞榮田たち、プレゼン大会の打ち上  
げで、すぐ近くの定食屋でご飯食べてるん  
だって」

瑞枝「え、ズルい」

雅也「行きたい」

夏美「(電話に)今から三人で行く」

## 10 定食屋(夜)

雅也、夏美、瑞枝、浩平、裕司、拓海、  
和也、篤志が食事をしている。

裕司「ようやく終わったな」

拓海「何とかやり切ったね」

篤志「うちのグループは大変だったんだよ」

夏美「何がそんなに大変だったの？」

篤志「途中で来ない奴もいたからさ。やっぱ  
り、そういう練習が嫌なんだろうな」

雅也「けど、練習が一番大事でしょ。ぶつけつけ本番なんて、今の俺たちにそんな実力あるわけないのにね」

篤志「さすが、うちー分かってるじゃん」  
雅也「だって、あれだけの人数の前で話するんでしょ、普通」

裕司「それができないのが、あつぽんのグループだったんだよ。大変だったな」

篤志「もうあんな授業二度とごめんだわ」

和也「まあ、プレゼンはもうないんだから。

良かったじゃん」

浩平「プレゼンはないかもしれないけど、この準備を進めていくうちに、何となくお互いの人間性が分かったよな」

瑞枝「それは言えてるかも」

雅也「仲良くやってほしいけどね、俺としては」

浩平「まあ、うちーの周辺だったら大丈夫だろうな。俺もうちーと同じグループに

なりたかったな」

雅也「俺と眞榮田君で、上手く行くかな」

浩平「俺はそう信じてるよ」

雅也「じゃあ、大丈夫かな」

お互い笑い合う雅也と浩平。

11 名古屋芸術専門学校・表（数日後）

雅也、和也、吉野、鈴島たちが、来校

してくる高校生たちを誘導している。

その近くで、ビデオカメラで撮影をしている浩平と夏美。

N 「プレゼン大会から数日が経過し、高校生を対象としたマイスクールキャンプというイベントが開催されました。学園祭が終わってすぐから、体験入学のスタッフをするようになった僕とやつすー、数人の同級生と先輩が、学生スタッフとして引率をし、その様子を収める映像班として眞榮田君となっちゃんが同行することになりました」

雅也、ポケットからスマホを取り出し、



時間を確認する。

雅也「（和也に）一旦、中の高校生の対応してくるわ」

和也「よろしく」

N「ちなみに、この数日前、僕はスマホデビューをしました」

12 サービスエリア

バスが止まり、一同休憩をしている。

雅也、バスから降りてくると、スマホを取り出し、電話をかける。

雅也「あ、もしもし。今ね、うちのバス、サービスエリアに着いたよ。眞榮田君たち、今どこ走ってる？ ああ、じゃあもうちょっとかな。分かった、待ってまーす」  
と、電話を切る。

N「このキャンプを機に、僕は眞榮田君と以前にも増して仲良くなったような気がしていました」

13 キャンプ場（夜）

キャンプファイヤーを行っており、雅也たちが炎の周りを囲んで立っている。N「これまで正直インドアだった僕にとって、専門学校入学以降、外で友達と何かをすることが楽しく感じるようになっていました」

14 宿泊ホテル・一室（夜）

浩平、夏美たちが映像編集をしている——側に渡部。

浩平「三時には終わらせるぞ」

夏美「うん」

険しい顔の浩平と夏美。

15 宿泊ホテル・講堂（翌日）

大きなスクリーンに、浩平たちが編集した映像が流れている。一同、談笑しながら見ている。雅也、浩平の隣に来ると、

雅也「すごいね」

浩平「昨日、三時までやってた」

雅也「夢の中にいたわ……」

浩平「うっちーだって、高校生相手の対応大

変だったんじゃないか？」

雅也「すぐ仲良くなれたから、そうでもない」

浩平「すげえな。それがうっちーの才能かも

しれないな」

雅也「どうかな。（と映像を見て）これは感

動物だわ。映像専攻がないとできないも

んね、こういう企画って」

浩平「でも、こういう映像に収めるには、楽

しんでる高校生っていう素材がいる。それ

を作ってくれたのは、うっちーたち学生ス

タッフのおかげだよ」

雅也「眞榮田君……」

と、グータッチをする雅也と浩平。

16 名古屋芸術専門学校・全景

17 同・5階・502教室

雅也がパソコンで原稿を書いている。

N「プレゼン大会とキャンプが終わり、ここから約一ヶ月は、特にイベントの予定もない長い夏休みが始まりました。しかし連休となっても、僕を始めよく顔を合わせている同級生たちは、自主制作等のために学校に来ていました。これは、入学当初に鈴木先生が授業でおっしゃった『高い学費を払っているなら、学校の設備を使いまくれ』という言葉に感化されているからなのかもしれない」

と、ノック音がし、瑞枝が入ってくる。

瑞枝「うちー、お疲れ」

雅也「あれ、みずちゃんどうしたの」

瑞枝「トイレで五階に来たら、ちようどうっ

ちーが見えたから」

雅也「ああ、そういうことね」

瑞枝「四階来れば良いのに」

雅也「本当はそうしたいんだけど、文章系は基本五階で作業してくれて言われて。四

階は映像とかゲームを作る専門ソフトがあるでしょ。基本的に映像系とゲーム系の学生が使うから、それ以外の人は五階で作業するように言われちゃって」

瑞枝「夏休みだし、別に他所の学生じゃないんだもの、何を遠慮することがあるの」

雅也「けど、みんなの邪魔にならないかな」

瑞枝「うちーだったら、歓迎してくれるよ」

雅也「そうかな」

瑞枝「行こ」

雅也「うん、そうする」

18 同・4階・401教室

浩平、夏美が作業をしている――雅也と瑞枝が入ってくる。

浩平「あれ、うちーいるじゃん」

瑞枝「五階で一人寂しく自習してたから、連れてきた」

夏美「最初から四階にいれば良かったのに」

雅也「お邪魔じゃない？」

浩平「全然。むしろうちーがいると安心感ある」

雅也「良かった。じゃあ、お邪魔します」

と、空いているパソコンの席に座り、  
準備をする――雅也の電話が鳴る。

19 同・同・廊下

雅也が出てくると、電話に出る。

雅也「もしもし春奈？ 久しぶり。どうしたの？」

春奈の声「お盆明けに、五十川が大阪から帰省してくるんだって。美彩と四人で久しぶりに会わない？」

雅也「うん。会おうよ。また予定決まったら連絡して。じゃあ」

と、嬉しそうに電話を切る。

N「高校時代にコンピュータ部の同期だった春奈からの久しぶりの連絡でした」

つづく